

北海道高等学校サッカー部Rankingの信頼性と有効性

関 朋昭*・中島 広基**・川上 光博***・宇留間 昂****

On the credibility and the validity of the ranking of
all high school soccer clubs in Hokkaido

Tomoaki SEKI, Hiroki NAKAJIMA, Mitsuhiro KAWAKAMI, Takashi URUMA

Abstract

We analyzed the credibility and the validity of the ranking of high school soccer clubs in Hokkaido which we had made last year. The result has shown that the ranking has high credibility and that it won approval from most of the coaches and has high validity. The next task for us is to put this ranking into practical use.

1 目 的

平成14年度から完全実施された学校週5日制に対し日本国の教育の大きな期待が寄せられる。その一方、学習指導要領の改訂に伴う学力低下の問題をはじめ、様々な指摘がなされている。学校体育に関しても変革が求められている。

その一つとして一向に改善されない運動部活動（以下、部活動とする）の曖昧な位置づけが挙げられる。部活動の果たす役割や意義としては、文部科学省の提唱する「21世紀教育新生プラン」においても、その意義を述べている。部活動は教育課程の中身ではないが、その意義やこれからの在り方に注目されている。

体育・スポーツ経営においては部活動に対してずっと以前から高い関心を向けられており子ども達への豊かなスポーツ環境としての部活動の活性化が今後の大きな検討事項である。

高等学校においては、少間口校では各校、各部活動で苦慮している現状が推察される。競技人口が多いサッカー競技に関しても例外ではない。高

等学校を一つのマーケティングとして捉えた場合、都市部の強豪校と比較して、少間口校ではチームとしてのmotivationをいかに維持し活動するかが大きな課題である。

関ら¹⁾が考案・発表した、「北海道高等学校サッカー部ranking」は、従来にはなかった競技力を数値化したものである。また、関ら¹⁾は、学校体育を対象としたスポーツ振興を考えた場合、運動部活動の活性化の成否が大きな役割を担っている。高等学校のサッカー競技においては、マスメディアの報道・取り扱い方が、学校・教師・生徒・保護者等に強く影響力をもたらす。一部の強豪校に対してのみならず、全体でサッカー競技を活性化していく方向性を見出すことを指摘している。

本研究は、関ら¹⁾の考案した北海道高等学校サッカー部の信頼性および有効性について検証することを目的とした。

2 方 法

2.1 信頼性について

信頼性の検討として、ranking対象大会は全国高等学校サッカー選手権大会（以下、選手権）および全国高等学校総合体育大会（以下、インターハイ）とし、各地区の予選から北海道大会の決勝戦までを対象とした（表1）。総試合数751試合。

* 助教授 一般教科
** 助教授 一般教科
*** 技 官 （技術専門職員・一般教科）
**** 教 授 北海道教育大学冬季スポーツ
教育研究センター

2.2 有効性について

ranking対象校の293校にアンケートを送付し、郵送にて回収した（回収率39.93%）。各項目については、5段階回答とした。

3 結果と考察

3.1 大会別の信頼性について

大会別に支持率を算出した。支持率とは、本研究ではrankingの客観性を測るものとして定義した。

大会別の支持率をまとめた (fig.1-1、Table1-2)。その結果、合計で77.36%の支持率が得られた。この結果から、4 試合中 3 試合はrankingを支持し、高い信頼性が得られたといえる。大会別にみてもインターハイ、選手権ともに大きな差が見られなかったことから同様の解釈が示唆できる。

3.2 ranking 差の信頼性について

各試合のrankingの差による信頼性をまとめた (fig.2-1、Table2-2)。Ranking差が40以内の場合、支持率は約60%であった。この結果から、5 試合中 3 試合はrankingを支持した。現実性と比較しても、妥当性が伺える。

表 1. 対象大会別の試合数

	一回戦	二回戦	三回戦	四回戦	準決勝	決勝	試合数
インターハイ	212	172	72	8	47	24	535
選手権	72	75	4	non	44	21	216
合 計	284	247	76	8	91	45	751

注) インターハイ：2001年、2002年
選手権：2001年

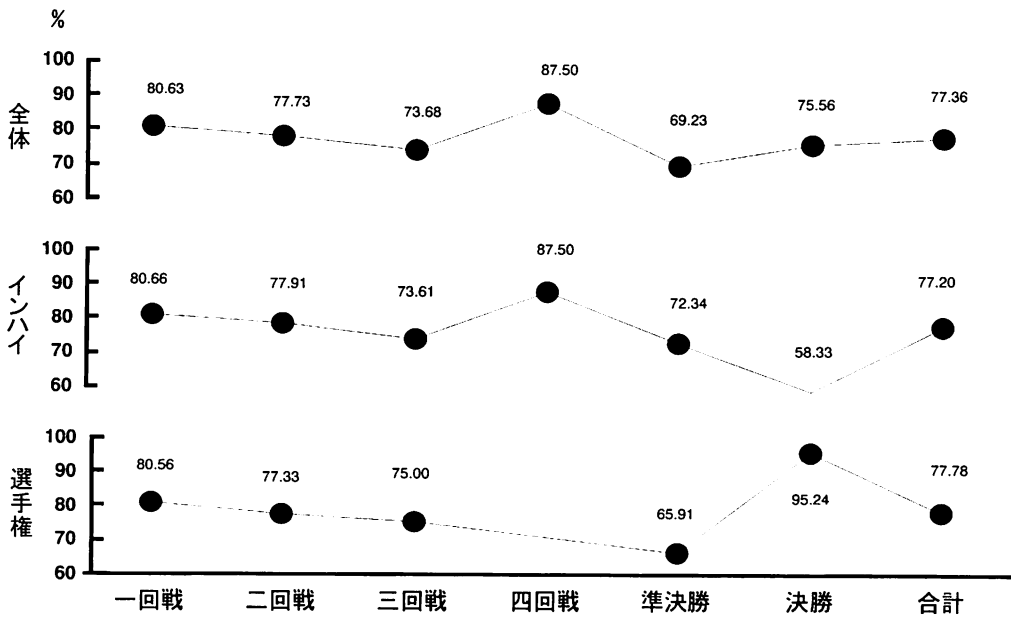


fig.1-1 大会別rankingの信頼性

Table1-2 大会別rankingによる支持率

何回戦	一回戦		二回戦		三回戦		四回戦		準決勝		決勝		試合数
	支持	不支持	支持	不支持	支持	不支持	支持	不支持	支持	不支持	支持	不支持	
インターハイ	171	41	134	38	53	19	7	1	34	13	14	10	535
(支持率)	80.66		77.91		73.61		87.50		72.34		58.33		77.20
選手権	58	14	58	17	3	1	0	0	29	15	20	1	216
(支持率)	80.56		77.33		75.00		non		65.91		95.24		77.78
合 計	229	55	192	55	56	20	7	1	63	28	34	11	751
(支持率)	80.63		77.73		73.68		87.50		69.23		75.56		77.36

注) 上段：試合数
下段：支持率 = (支持 ÷ 総試合数) × 100

3.3 ranking の有効性について

rankingの有効性についてのアンケート調査結果をまとめた（表2）。

活性化（高校、チーム）につながると約6割が回答した。さらに、中立的な回答（ふつう）も含めると約9割が有効性を支持したといえる。「指導者」、「選手」のモチベーションについては、活性化と同様に中立的な回答（ふつう）も含め約9割が有効性を支持した。

これらのrankingが及ぼす有効性について高い回答が得られたことについて、従来にない新しいツールに対する期待と誕生に対してであると推察される。

Rankingの考案で危惧していた「差別化」につ

いては、誤解が無いように補足資料で説明した効果がみられた。回答は信頼性を得るため逆スケールで回答を求めた。その結果、否定的な回答をした割合が約4%であった。さらにranking group別にみたアンケート結果についても、最下groupのFにおいて他groupと統計的な有意差は認められなかった。以上のことから、rankingがもつ負のイメージは無いものと推察される。

Rankingの理解・年数・方法といった項目についても、高い有効的な回答が得られた。

最後に、すべての10項目のアンケート結果で、ranking group別の統計的な有意差は認められなかった。

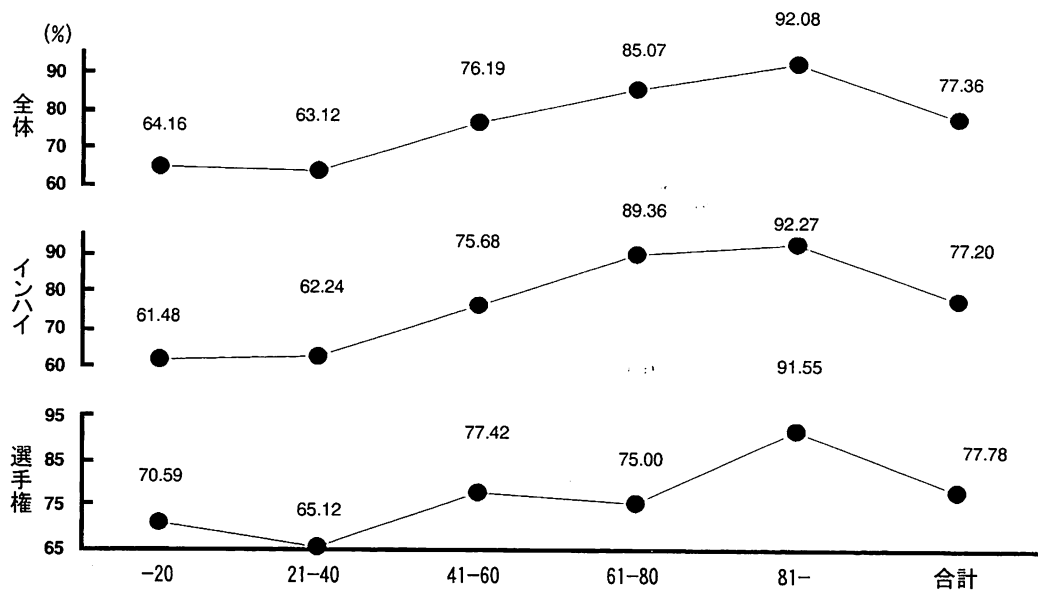


fig.2-1 ranking差による信頼性

Table2-2 ranking差による信頼性

ranking差	-20		21-40		41-60		61-80		81-		試合数
	支持	不支持	支持	不支持	支持	不支持	支持	不支持	支持	不支持	
インターハイ	75	47	61	37	56	18	42	5	179	15	535
(支持率)	61.48		62.24		75.68		89.36		92.27		77.20
選手権	36	15	28	15	24	7	15	5	65	6	216
(支持率)	70.59		65.12		77.42		75.00		91.55		77.78
合計	111	62	89	52	80	25	57	10	244	21	751
(支持率)	64.16		63.12		76.19		85.07		92.08		77.36

注1) 上段：試合数
下段：支持率 = (支持 ÷ 総試合数) × 100
注2) ranking差
-20：対戦がranking20以内の試合
21-40：対戦がranking21以上から40以内の試合

表 2. Rankingに対するアンケート結果

	高校活性化	地区活性化	チーム活性化	指導者モチ	選手モチ
はい	58.26	48.70	57.89	64.35	66.96
いいえ	12.17	16.52	12.28	12.17	13.04
ふつう	29.57	34.78	29.82	23.48	20.00
はい（ふつう）	87.83	83.48	87.72	87.83	86.96
いいえ	12.17	16.52	12.28	12.17	13.04
	意義	差別化	理解	年数	方法
はい	55.26	4.39	66.37	50.44	49.56
いいえ	14.91	48.25	8.85	17.70	11.50
ふつう	29.82	47.37	24.78	31.86	38.94
はい（ふつう）	85.09	51.75	91.15	82.30	88.50
いいえ	14.91	48.25	8.85	17.70	11.50

注 1) 数値はすべて%である
注 2) 回答はすべて 5 段階評定、集計については以下とした
はい： 5 or 4、ふつう： 3、いいえ 2 or 1

表 3 ranking group別のアンケート結果

	高校活性化		地区活性化		チーム活性化		指導者モチ		選手モチ	
	average	s.d.	average	s.d.	average	s.d.	average	s.d.	average	s.d.
A	3.278	1.018	3.278	1.018	3.471	1.007	3.667	0.970	3.611	1.037
B	3.435	0.945	3.217	0.850	3.478	0.846	3.565	0.992	3.739	0.964
C	3.882	0.993	3.941	1.088	3.941	1.029	3.824	1.131	3.882	1.111
D	3.857	0.949	3.500	1.160	3.643	1.082	3.786	1.051	4.071	0.829
E	3.625	0.806	3.438	1.031	3.938	1.124	3.813	1.223	3.938	1.237
F	3.667	0.840	3.444	0.922	3.444	1.097	3.778	0.943	3.444	1.199
計	3.604	0.933	3.453	1.006	3.638	1.020	3.726	1.028	3.764	1.065
	意義		差別化		理解		年数		方法	
	average	s.d.	average	s.d.	average	s.d.	average	s.d.	average	s.d.
A	3.444	1.199	2.333	0.907	3.824	0.728	3.235	0.831	3.471	0.624
B	3.565	1.080	2.261	0.752	3.826	1.029	3.318	1.129	3.391	0.783
C	3.706	0.985	2.471	0.717	3.588	0.712	3.706	0.985	3.471	0.717
D	3.714	1.139	2.286	0.825	4.357	0.842	3.357	1.151	3.857	1.099
E	3.563	0.814	2.250	0.856	3.813	1.047	3.438	1.153	3.067	1.100
F	3.353	0.931	2.647	0.862	3.235	1.147	3.333	1.188	3.222	0.943
計	3.552	1.019	2.371	0.812	3.760	0.970	3.394	1.065	3.404	0.887

注 1) 数値は 5 段階評定の平均得点
注 2) A： 1 位から50位
A から F までを50位区分とした

4 ま と め

本研究のねらいは、関ら1)の考案した高等学校サッカーrankingがいかに信頼性があり、有効性があるかを検討した。

その結果、以下のことが明らかになった。

1、 対戦においては、約78%（4 試合中 3 試合）は、rankingを支持した。

2、 ranking差が大きくなるほど、信頼性が得られた。

3、大会においても大きな差が認められなかった。

4、 rankingに関するアンケートについては、有効性がみられた。

競技力の数量化という新しいツールの考案についての信頼性および有効性については、本研究の結果から指導者、選手から指示されたものといえる。今後は、サッカー協会とリンクさせ、情報を発信していくことが、高等学校のサッカー競技振興の一助になるものといえる。また、幅広い認知を得ることで、全国的なツール開発も可能であろう。

rankingは、近年の諸問題の影響から衰退化する学校運動部活動に対して新しい展開を投げかけるものであるといえる。

今後、各競技団体への適用やインターハイにおいて学校別総合rankingの算出なども衰退化する学校運動部活動の歯止めに繋がる可能性も考えられる。

今後の課題および取り組みは、実用性へ挑戦といえる。

引用・参考文献

- 1) 関朋昭、中島広基、川上光博、宇留間昂；北海道高等学校サッカー部Rankingの算出の試みについて、苫小牧工業高等専門学校紀要、第36号、PP207-211、2002
- 2) 関朋昭、中島広基、宇留間昂；競技力向上をめぐる高等学校サッカー部のマネジメントについて、苫小牧工業高等専門学校紀要、第35号、PP159-164、2000
- 3) 関朋昭、中島広基、川上光博、宇留間昂；高等学校サッカー部の競技力と指導者行動の関係について、苫小牧工業高等専門学校紀要、第36号、PP157-160、2001

(平成14年11月18日受理)

